



E・Nは  
お姉ちゃん



さぬき      ほっち

私、E・Nがまだ一歳になるかならないかの頃、その事件は起こった。私の家にある人物がやってきたのだ。その人は、私がまだ寝返りの個人練習を重ねている頃にも、何回か泊まりに来たことがある。

私が生まれる前にも、ママのためにたこ焼きを作りに来たことがあるという。私は、私が生まれる前の出来事については、あまり言及すべきでないと考えているので、ここではもうこれ以上言わずにおこう。ただ、私のバーバはトルコ人、ママは日本人で、バーバはたこがきらいだったため、たこ持ち込み禁止令が敷かれていた中、その人はちくわでたこ焼きを作ったことだけは書いておこう。しかも、重たいたこ焼き器まで持参したという。すごい根性だと思う。

その人は、私の寝返り練習を見て、すごいすごいと喜んでいて。何にでもコツがあるだけの話なのだ。ひっくり返る時に、どうしても手が邪魔になるのだが、先手を打って両手を組んでおくと、スムーズに回ることができる。たこ焼きを作るとき、ひっくり返す前にまわりの焦げ付きを取っておくことと何ら変わりはないのである。そう教えてあげたかったのだが、その時はすぐいなくなってしまうと、ゆっくりとした説明の時間が取れずに残念だった。

私が寝返りも、おすわりもたっちも、とっくにマスターして、そろそろ歩き始めようとしているときだった。その人がやって来たのだ。また泊まって行くのかなあと考えていたら、たくさんの荷物もいっしょに来ていて、

いっこうにいなくなる気配がない。私には何一つ説明がなかったが、ママと話していたことによると、その人はほとんど毎日お出かけをするという。そのお出かけと関係があるようだったが、詳しくは分からなかった。

最初、私のことをその人は、「Eちゃん」と呼んでいた。ママのことは「お姉ちゃん」と呼んでいた。ママはママなのにおかしいなあと考えていたら、後で気が付いた。その人は、私がママに抱っこされてあげているとき、ママのほうを向いて「お姉ちゃん」という。だから、私は、その人がママを「お姉ちゃん」と呼んでいるのだと勘違いしてしまったのだ。よく考えてみれば、その人は、私のことを「お姉ちゃん」と呼んでいるのだと分かった。それで、なぜだか知らないが突然、その人が私の妹として私の家にやってきた以上、私は姉として、妹に恥ずかしくない行動をとらなければと決意した。

妹がやってきたのは、ストーブが出ていた時期だった。ストーブは熱いので、触ってはいけないことになっている。ストーブだけではない、トースターも危険だ。私が「チ！」と分かって分りやすく教えてあげたら、妹は笑い出すではないか。とびきりおかしくてたまらないと言った様子だ。おまけに嬉しそうだ。なんていたずらっ子なんだろう、と思った。

「教えてくれたのね、ありがとう、そうね、あちーね。」と言うのは良いが、それでもなおトースターを使おうとする。仕方がないので、もう一度「チ！」と言ってあげた。「うん、うん」と妹は真剣に首を振って言う。分かっているならやめればいいのに、姉をするのも楽じゃないな、とその時思った。

その頃、食パンの上にピザ用チーズを載せてトースターで焼くのが、私の家でブームになっていた。ピザ用チーズは、バーバの大好きなトルコ料理、シガラボレイに欠かせないので、大袋で買ってあった。「春巻きの皮」で、チーズとパセリを包んで揚げる。その揚がった形がシガラ

、トルコ語でタバコ、に似て

いるため、シガラボレイと言うそうだ。私はそこまでの説明はよく聞くから知っている。だが、ボレイはなんなのか、私も知らない。とにかく、ヘルシーでとてもおいしいのだ。その残りチーズを使ったピザは、妹も大好きだった。よく食べていた。ただ、自分でトースターを使うのはいただけないと思った。

バーバの帰りが夜遅くであるため、ママや私も夜遅く寝て、朝遅く起きることが多い。だが、妹は朝早くから出かけることが多かったので、一人ではかわいそうだと思います、朝食に付き合っただけあげたこともあった。そんな時、いつも妹は、悲鳴に近い歓声をあげて喜んでいて、何か、悪事がばれたかのような顔で私を発見するのだ。よっぽど嬉しかったのだろう。

喜ぶといえば、妹は、私に遊んでもらうのが好きだった。妹が来た頃、私は歩きの訓練をはじめていた。その私の手を取って、「たっちたっち、とんとん。たっちたっち、とんとん。」と言いながら、妹も歩く練習をしていた。よっぽど気に入ったようで、繰り返し繰り返しやりたがるから、仕方なく付き合っただけあげていた。あれは結構疲れた。ますます、姉は楽じゃないなと思った。

こんなこともあった。私たちがまだ寝ている時に、ママが近所に買い物に行ってしまった、二人だけでお留守番をした。最初私は、起きてママがいなくて、ひとりぼっちになったかと思った。ママがいなくてひとりぼっちになった時は、すぐに大声で泣くべきなので、私は泣こうとした。すると、妹がいるではないか。また、悪事がばれたかのような顔をして、「おはよう、Eちゃん」と白々しく言う。きっと、泣きたいのを我慢していたのだろう。私の顔色をしきりにうかがっている様子だった。ここは姉として、しっかりしなければならぬと思ひ、妹のそばに行っただけあげた。妹が私に抱っこされたいようだったので、抱っこしてあげた。「よしよし、大丈夫だよ」とまるで自分自身に言い聞かせるように語り掛けてくるので、妹ながらけなげだなあと思ひ、私もよしよしをしてあげた。

後で、ママが帰ってきて、「どうだった？」ときくので、説明したかったのだが、妹が「Eちゃんめっちゃ偉かったよ！」と嬉しそうにいう。まあ、そういうことにしておいてあげようと思った。

妹は、私の知らないところで、いろいろと大変であるようだった。帰ってくるなり倒れこんで、長い間起き上がらないこともあった。初めはなんでもないと思っていたが、だんだんと、これは病気ではないかと思うようになった。だが、妹には何も言わなかった。せつかく何かがんばっているようだったのに、私から何かを変えるべきではないと思った。あのまま、そのまます、続けさせてあげたかった。そういう妹のために、私はせめて、帰ってきた時笑顔で迎えてあげよう決めた。そして、お昼寝などで寝てしまっているとき以外は必ずそれを実行した。妹は、「Eちゃんの顔を見るとほっとするわ。」とママに言っていた。よく「疲れた」というので、肩たたきもしてあげた。動くことさえ辛そうな時には、妹が私を呼んだらすぐにそばへ行ってあげた。

妹との生活は、始まりと同じく突然終わった。今回も私には説明がなかったが、やはり、妹の病気が関係していたらしい。そのために、お出かけもできなくなってしまったようなのだ。そういえば、ある日妹は、病院から帰ってきたようだったが、とても辛そうな顔をしていた。私も、検診や予防接種があるのでなんとなく分かるが、妹は、ずっと前から痛いのが続いていたらしい。なぜ痛いのがはっきりしたらしいが、それでたくさんの薬をもらってきて、がっかりした様子だった。何がそんなにいやだったのかはわからないが、ママのいないところでこっそり泣いて泣き止まないこともあった。何回か、病院へお出かけしていたが、ある時帰ってきて、私を抱っこしようとして突然「いたいいたい！」と言って下ろされたことがあった。そのあと、妹は非常に悲しそうな眼で私を見つめていた。私は、妹に何か言葉をかけてあげたかった。たかが病気じゃないか、元気になってまた抱っこされてあげるから、病気のままでも、抱っこができなくともいい、あなたは私の妹なんだから、何も遠慮はしなくていいんだよと、言ってあげたかった。たこ焼きの根性はどこへ行ったんだ、たこ焼き器がなければ持っていく、たこがダメならちくわと、どこまでも目標を達成するまでくじけないんじゃないかと、ハッパをかけてあげたかった。だが、私の予定では、しゃべりはもう少し後だったため、仕方なくただ微笑みかけてあげた。妹は、私の顔をただじっと見つめていた。

妹がいなくなった日、私は朝、いつものように妹の相手をしにいった。すると、いつもの場所にはだれもいなかった。カーテンの後ろも探してみた。妹は、いないいないばあも大好きだった。妹が泣くとき、これをすると必ず泣き止んだものだ。だが、今回は隠れてはいなかった。そうか、またお出かけだろうと思った。その日から、妹は、ずっと帰ってこなかった。

一ヶ月ぶりに見慣れた玄関を開けると、そこに私の小さなお姉ちゃんが立っていた。

「ンモ。」（あなた遅いじゃないの、どこをぶらついてたの。）

そのまま、帰省した息子を迎える田舎のおふくろさんのような笑顔で、部屋のなかに誘導してくれる。

「あ、お帰りー。」

こちらは本物の私の姉だ。そして二人は、同時に猛烈な勢いで、私に向かって近況を報告し始めた。

大学に入学してからの半年間、私は姉の家で居候させてもらっていた。姉は外国語大学でトルコ語を学び、トルコに留学して、トルコ人と結婚し、帰国して女の子を出産した。その姉と、姉の夫つまり義理の兄と、姉の娘のE・Nちゃんとの共同生活だった。

私は、弟がいるので、小さな子供のお世話には自信があった。しかし、そんな私にも、そして姉にもかなりの衝撃を与えたある現象がある。それは、Eちゃんが、自分のことを私の姉だと思い込んでしまったことだ。

Eちゃんは、色が白くて、小さくても内に秘めたパワーを感じさせるような、しっかりとした体つきをしている。声は低く、泣き声は腹から発声されてとてもでかい。寝返りも、おすわりも、たっちも、自分で練習をはじめ、研究に研究を重ねてマスターしてきたという、チャレンジ精神、自立精神旺盛な人である。バーバ（トルコ語で、お父さん）が大好きで、初めに発音できたのも「バーバ」だ。トルコ人らしい味の好みをしていて、すっぱい物好き。ヨーグルトに砂糖などはもってのほか、ジュースも嫌う。

居候をはじめた当初、Eちゃんはまだ一歳にも届いていなくて、私がいるという環境に慣れず、それなのになぜか私に抱っこをせがんでばかりいた。歩くのも五、六歩行ってよろめく、といった状況だった。ママがいないと泣いて、「いないいないばあ」をすると喜ぶ、普通の赤ちゃんだった。

それが、居候生活も少し落ち着いてきたかなという頃、異変が起こり始めた。

ある日、Eちゃんがあまり長く泣き続けるため、私は、弟の時とった杵柄で、泣きまねをしてみた。すると、Eちゃんは泣き止んだ。味をしめた私はしつこく同じ手を使い続けた。最初は失敗することもあった。だが、回を重ねるにつれ、ほとんどの確率で泣き止んでくれるようになった。それどころか、「ばあ？」と、私のご機嫌まで伺ってくれるのだ。

「さすが長女、しっかりしてるよね」と、姉とは笑いあった。しかし、ことはそれだけでは収まらなかった。

Eちゃんは、ママがいないとすぐに泣く人だった。Eちゃんがすっかり歩けるようになり、走れるようにもなったある日、彼女がまだ寝ている時に、姉が買い物に出て、私が留守番をしていた。そして、何かの拍子にEちゃんが起きてしまった。彼女は玄関まで猛ダッシュして、トイレの中もチェックして、完全にママがいないと分かると、大声で泣き出した。泣き出そうとしたの方が正しいかもしれない。その時、Eちゃんは私を発見した。すると突然泣くのを止め、私を慰めにかかったのだ。明らかに、甘えるのではなく、「慰める」態度で近寄ってきて、背中を軽くたたいてくれた。そして、「いっしょにママを待とうね」といわんばかりに隣に座ったのだ。後で姉とは、「

プライドが高いんじゃないかな」などといいながら、それでもまだ笑っていた。

姉と私は、よく、疲れた疲れたといって、お互い肩を叩き合ったりしていた。そういう時いつもEちゃんが間に入ってきた。それも、私が姉に叩いてもらっている時にだ。「やりにくいでしょーE。」姉はいつも言っていた。それも一回や二回の話ではないのだ。

ママがいないときの反応が、度重なるにつれ、私たちは冗談で、「Eちゃんはお姉ちゃんだねえ」などというようになっていた。その後だんだんと、Eちゃんが本気で私のことを妹と思っているのではないか、という疑惑が固まってきた。肩たたきの件も、自分が私の姉だから、独占してやりたいということなのではないかと考えられはしないか？相変わらず、私が泣きまねをすると、Eちゃんは自分がどんなに泣き叫んでいてもぴたっと止める。試しに泣きながら「来てええええ」と甘えて言うと、何もかも放り出して来てくれる。ママがいないときのしっかりとした態度も、妹を安心させるためではないのか？私たちはそう考えた。

そして、その考えを裏付ける出来事が起こった。その日、私はとても疲れていた。ぐったりして

、「ごめん、お姉ちゃん、ちょっと肩たたいてくれへん？」

と言った。姉はそのとき、隣の部屋にいたので、私は大きめの声ではっきりとそう言った。すると、Eちゃんがとんできて、しょうがないなあという感じで私の肩をもみ始めたのだ。

「えええええええ！」と私は叫んだ。「ちょっとお姉ちゃん、今Eちゃん、お姉ちゃんて言ったのに反応したでええ！」

しかしEちゃんは、何をうるさく言っているのかしらねえという感じで、一人落ち着いていた。なぜ、こんなことになったのかと、二人でいろいろと検証してみた。まず姉が考えたのは、Eちゃんはまだ小さいので、当然母子分離ができていない、母親と自分とを同化している、そのために、姉の妹である私を自分の妹とも思っているのではないか、ということだ。私は、Eちゃんを抱っこしている姉に向かって、頻繁に、お姉ちゃん、お姉ちゃんと呼びかけていたので、そのせいもあるのではないかと考えた。

私が「お姉ちゃん、来て。」というときに来てくれる。だが姉が言うと、Eちゃんは、何を言っているのかしらねえ、と見向きもしない。このことから、音声的な部分だけで反応しているわけではないことも分かった。

Eちゃんの妹としての楽しい日々は、その後終止符が打たれた。経済的理由と私の病気がわかったことで、態勢の立て直しのため、休学し、実家に戻ることになったのだ。最後のほうは、痛みのため、Eちゃんを抱っこしたくてもできなくなっていた。不思議なことに、彼女は私を妹と思っても、抱っこだけは普通にされるのだ。いや、彼女は、自分が私を抱いているのだと思っていたのかもしれない。そんな顔をしていた。

この時期、私はたくさんの別れを経験していった。挫折と言っても良かった。大学も、アルバイトも、一旦すべて休止状態にしたため、それらとも、そこで出会った人々ともお別れだった。アブさんとも、姉とも一旦お別れだった。そして、Eちゃんと別れることが一番辛かった。

6月、アブさんや他のトルコ人のお仲間と一緒に、シガラボレイを作って国際フェスティバルに出店したこと。「いらっしやいませ、トルコのシガラボレイ！」という私の呼び声を、トルコの兄ちゃんたちが真似してがんばっていたこと。揚げ鍋の熱さや、チーズのとろけ具合。8月、アブさんと姉と、私の父や母、弟と一緒に、Eちゃんを連れて海へ行ったこと。その時私だけが行かなかったのも、エダーちゃんが帰ってくるなり、オーバーアクションで海の感動を伝えてくれたこと。Eちゃんは実際に海では、無表情でしきりに周りを伺っていたという。しかし、それは一



生懸命感觸を味わっていたのだ。私に、体をいっぱい ippaiに使って、波や、風、雰囲氣を伝えようとしていた、あのすごいダンス。私の頭の中は、思い出と、自分の病氣などへの「何で？ どうして？」でいっぱいだったが、ただただ事務的に用事をこなして

いった。ちょっとでも押さえが外れれば、感情が爆発しそうだったからだ。そんなわけで、Eちゃんともさりげなく別れた。

私が下宿を引き払った日、Eちゃんは、朝起きてきて、私を探したらしい。「ばあ？」「ばあ？」といいながら、あちこち探し回った挙句、はっと思いついてカーテンを開けたという。その後、そう、おでかけね、と納得した様子で探すのを止めたというのだ。

それから一ヶ月、姉の家の私がいた場所は、Eちゃんのプレイルームと化していた。何度片付けても、Eちゃんが散らかしてしまう本棚には、レースの布がかかっていた。それに目を留めると、Eちゃんと姉が

「ああ、これはねえ、散らかってるから目隠しで。」

「アア、ンモ、ウン、ヲモー。」（みてごらんささい、こんなの付けて、本が出しにくいじゃないの、ねえ。）

と主張した。どちらの言うことも聞かなければと思うし、二人とも同時にしゃべるし、Eちゃんにはどう返事したものか分からないので、大変だった。

「じゃあ、時間もそろそろだし、帰るね。」私はそう言って、席を立った。今日は、姉にお届けものをしに来ただけなのだ。二人の姉は、そのまましゃべりつづけながら、玄関まで送ってくれた。エレベーターに向かって歩いて、振り返ったら、ドアのところで、ママに抱かれて泣いている小さなEちゃんがいた。

私が妹と2度目の再会をしたのは、思いがけずおばあちゃんの家でだった。私が到着した時、妹は、次の日にもったいぶってふたを開けて食べる、毎年恒例の料理を作り終えたところだった。

「明日だからね・・・Eちゃんに見つからないように隠したところだよ、ぎりぎり間に合った。」そう妹がママに言っていた。私に料理を誉めてもらいたいため、ぎりぎりまでとっておきたかったのだろう。だが、久しぶりに会っての第一声がこれだ。もっと何かほかのことを言ってくれても良かったのではないかと。多分、照れていたのだろうとは思っている。いなくなってから一度だけ、ふっと現れて、帰ってきたかと思っただのにすぐまた行ってしまったが、あの時から一体どこへ行ったのかと気をもんでいた。なんだ、ここにいたのかと思ったら、安心した。なにより、妹に明るさが戻っていて良かった。

妹がいなくなった後、私は通信教育にはまりだした。その付録ビデオで見た、「げんこつ山のたぬきさん」を、妹にも教えてあげた。案の定、妹は大喜びだった。なかなかのみこみが早かった。付録のぬいぐるみも持ってきた。妹はすぐに飛びついた。ぬいぐるみの声を出して、私に嬉しそうな顔を向ける。ママが、おばあちゃん家に行く準備で、たくさん私のおもちゃを用意した訳が分かった。妹のためだったのだ。妹はとても元気にはしゃいでいた。おじいちゃん、おばあちゃん、あっかくん、それに、バーバ、ママ、私のための食事作りで、いそいそと楽しそうだった。ご飯を食べる時、前と違う薬を飲んでしたが、「まじい！」と叫ぶのは同じだった。

次の日、「あけましておめでとう」とみんなが集まって言った。新しい年、新しい世紀の幕開けだった。妹の料理も晴れてふたが開けられた。私は、にんじんと大根のなますが気に入った。妹はとても喜んで、私が帰る時、おみやげになますをビンに入れて持たせてくれた。

今年、私は、ほいくえんに入りたいと考えている。妹との生活で、私はすっかり人のお世話が好きになった。妹がいなくなった後、よく外に出るようになったし、近所の仲間といっしょに遊ぶようになった。きっとほいくえんは、もっともっと楽しいに違いない。私がいつも金網に張り付いて中をのぞくので、ママがおもしろがって、私の知らないところで妹に報告したらしい。妹が

「Eちゃんには負けていられへんわ。」

と言っていたという。その言葉を聞いて私はとても嬉しかった。私だって負けてはいられない。妹を引っ張っていくためにも、これからもがんばろう。

## E・Nはお姉ちゃん

<http://p.booklog.jp/book/27303>

著者：さぬきほっち

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sanukihottea/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27303>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27303>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.